

# ファンタジーの古典『指輪物語』を読み直す

## － 王権と道化について －

渡辺 美樹

J. R. R. トールキン (J. R. R. Tolkien) の作品『指輪物語 (*The Lord of the Rings*)』<sup>1</sup> ではホビット (hobbit) という従来神話や民話には登場したことのない新しい妖精が道化として活躍する。フロド (Frodo) という名のホビットがやがて Gondor の王となる Aragorn に道化として仕えているのである。Aragorn は、この物語の始まりではまだ王位についておらず、謂わば流離いの王子として、自らの王国 Gondor への帰還を目指している。本稿では、正統の王子からの王権の篡奪、王子の苦難と放浪、そして復権へというこの王権神話を道化役のフロドがいかに支えているかを明らかにしたい。

『指輪物語』は、ファンタジーの定石通り、古い写本に基づいて書かれたという設定になっている。その写本とは『指輪の王の没落と王の帰還 (*The Downfall of the Lord of the Rings and the Return of the King*)』というフロドが書いた歴史書とされている。つまりこの物語は、この写本のタイトルが示すように、「指輪の王の没落」の物語と「王の帰還」の物語という二つのプロットから成り立っており、その平行する二つのプロットを繋ぐのがフロドの道化としての存在である。「偶然性の狩人」<sup>2</sup> と呼ばれる道化の強運がダブル・プロットを一つの物語にまとめ上げていると言い換えることもできる。

「指輪の王の没落」とは、世界支配の力を持つ「一の指輪 (One Ring)」を作り出した魔王サウロン (Sauron) が、その野望の実現を目前にして、フロドによって指輪もろとも滅ぼされる物語である。フロドは、万人に邪悪しかもたらさない「一の指輪」を破壊するためにサウロンの王国に潜入する。この指輪

の魔力を失わせる唯一の場所がこの王国の中枢部にある「滅びの亀裂 (Cracks of Doom)」だからである。フロドがその使命を果たすまで、アラゴルンは潜伏中のフロドがサウロンという「赤い目の悪魔 (Red Eye Evil)」の視界に入らないように英雄として活躍をする。このフロドの冒険譚とアラゴルンの英雄譚は同時並行して進んでいくが、フロドの使命達成がなければ、アラゴルンの王権回復という物語の枠組みは成立しない。

一方「王の帰還」とは、流浪の民となった王家の末裔アラゴルンが長期に渡って国王不在であった王国に再び王権を蘇らせる物語である。アラゴルンは、イシルドゥア (Isildur) の血を引く Gondor 王家の出で、この物語の中で唯一王位継承権を所有する人物である。彼が本来統べるはずの Gondor は、正統の王が帰還する日まで、王家を補佐する執政家の支配が認められている。この物語に登場する執政は、隣国の王でもある魔王サウロンに攻め込まれた上、幻術によって国が亡びると信じ込まされ、首都攻防の戦いの最中に自決する。王国神話の視点に立てば、国王を欠いた王国が滅びるのは当然の成り行きである。アラゴルンは、唯一の王位継承者であるが故に世界支配を目論むサウロンに命を狙われて、「馳夫 (Strider)」という名の放浪者として正体を隠して登場する。しかし物語の終盤に至って自らの「癒しの手 (royal touch)」によって「黒い息 (Black Breath)」の呪縛から人々を解放し、正統の王として顕現する。従って、アラゴルンの物語とは典型的な王権神話 (正統の王が苦節の末に王権を回復する物語)<sup>3</sup> に相当する。

フロドが破壊しようとしている「一の指輪」は、魔王サウロンが世界を支配するために作ったもので、それ自体がサウロンの力と邪悪な性格を有し、サウロンの分身として互いを求め合う存在である。サウロンが「指輪の王 (The Lord of the Rings)」と呼ばれる所以である。サウロンは、遠い昔エルフと人間の連合軍によって一旦は滅ぼされ、その指輪も戦利品としてアラゴルンの祖先イシルドゥアの手に渡った。賢者たちは邪悪な指輪を壊すことを主張したが、王イシルドゥアは首肯しなかった。指輪の持つ支配力に幻惑されたのである。その結果、指輪をはめた王は、指輪が引き寄せたサウロン創出のオーク族 (The Orcs) によって殺された。この出来事は指輪が分身の敵を取った話とみることができよう。その時に指輪は行方不明となるが、その後ホビット族のスミアゴル (Sméagol) が友を殺害してまでその指輪を手に入れ、地中の奥深くに潜む。サウロンの許に戻りたいという指輪の意志が働き、指輪はホビット族

のビルボ（Bilbo）の許に転がり込む。やがてビルボの後継者であるフロドがそんな邪悪な指輪とも知らずにその指輪を譲り受ける。フロドはアラゴルンに指輪の正当な所有権を認めそれを差し出すが、アラゴルンは指輪を受け取らない。祖先の犯した過ちを償うために指輪を破壊する使命をフロドが身代わりに引き受けることを望むのである。なぜなら、祖先の「イシルドゥアの破滅のもと（Isildur's Bane）」とも呼ばれるこの指輪をアラゴルンが手にすれば、イシルドゥアと同じ運命を彼も辿ることになるからだ。

ここで指輪をめぐるフロドとアラゴルンの関係を王権神話の視点から見てみよう。理念上神聖な王は悪に触れることができない。そんなことをすれば神聖さが穢れてしまうからである。それゆえにサウロンの分身であり「絶対悪」である指輪に、正統の王たるべきアラゴルンは係わることができないのである。王の完全無謬性という王権神話の原理からして、王が実際に犯す過ちを引き受ける王の身代わり、すなわち道化と呼ばれる存在が不可欠なものとなる。ここにホビット族フロドの存在理由がある。かつて王イシルドゥアが指輪によって滅亡したことは、その汚れを担う道化がいなかったからであると王権神話上説明できる。つまり王というものが光り輝く存在である限り、その王の影の部分を引き受ける贖罪山羊としての道化が不可欠であり、この物語内でのフロドの役割とはこの贖罪山羊にほかならない。

フロドが贖罪山羊としての道化であることは、様々な視点から説明できる。まずフロドの一族であるホビット族の特徴が挙げられる。ホビット族とは、「小さい人（Little People）」というその名前が示すように、親族関係にある「人間（Big People）」の半分の背丈しかない。また彼らは他の妖精のように特殊な力を持つわけではなく、能力の点から言ってもただの人間に近い。つまり人間の中の「小人」である。小人は歴史上宮廷道化として王に仕えていたことで知られている。小さいということが王にとって悪魔の凶眼避けに役立つと思われたために小人は「口汚い贖罪山羊」として玉座近くで侍ることができた。この物語ではこの構図が逆転している。王アラゴルンが道化フロドの邪眼避けとして働くからである。

ホビット族が王の過失を償う道化の一族であることは物語の中で語られる様々な細部から明らかである。ホビット達は旅に出かけてそれぞれ道化としての役割を果たす。ビルボは前作『ホビットの冒険（*The Hobbit*）』<sup>4</sup>で欲深な王の行為を償うために自分の分け前を竜の被害にあった人々に提供する。また執

政の小姓役となったピピン (Pippin) は、病気の息子を道連れに自決しようとする執政からその息子を救い出す。そしてメリー (Merry) は、王の側に仕え王を楽しませる役割を求められただけであるにもかかわらず、王の決定に背いて戦場に出かけ、王を斃した幽鬼 (Ring Wraiths) の王 - 男の手にかかって死ぬことはないと言われた「一の指輪」の僕 - を斃す手助けをする。戻ってから彼らはその旅の物語 - 旧王の死と新王の即位という王権神話 - を語る。ここで旅と道化性の関係について一言触れておきたい。旅に出かける前のホビット達は、ビール腹をした飲み食いが大好きないたずら者、「陽気な衆 (a merry folk)」である。これは「陽気な伴食者としての宮廷道化」の側面を示す。また彼らは旅に出かけることで、「王の過失を償う贖罪山羊としての道化」の側面を顕わにする。旅から戻ると今度は「語り部としての道化」の側面を示していく。この物語の始めでは、旅から戻って回想録を書き上げたビルボだけが、ホビット族の中で唯一詩人としての道化性をもつ人物である。しかし物語が進むにつれて、フロドやサム、メリー、ピピンなどのホビット達も、語り部、詩人としての道化性を獲得していく。サウロンとの戦いを描いた歴史書つまり『指輪物語』の原本は、ビルボの書きかけの原稿を引き継いだフロドが、メリーとピピンの語る話を聞き取って書き上げたものであり、その後の出来事はフロドの後継者となるサムが書き足すからである。

フロドの召使いサムも、ドン=キホーテに仕えるサンチョ=パンサ同様に、主人の旅の道連れという点で道化であるといえる。フロドの庭師であるサムは、フロドと共に旅に出るが、彼の世話する庭と主人フロドとが分離していることによって庭師としてのサムとフロドの従者としてのサムとに引き裂かれている。この自己分裂意識はサムの道化性をよく示している。フロドの従者サムは一時的に指輪保持者の役割を肩代わりすることになるが、これはサムが道化フロドの旅の道連れとなることでフロドの道化性を分かち持ったことを示している。

ゴクリ (Gollum) と呼ばれるスメアゴルも典型的な道化として分析できる。彼は元々ホビット族の出身であるが、「一の指輪」を手にしたことによって故郷や仲間から離れ、ゴクリとして地下に暮らすことになる。彼もまた「旅」の途上にあるといえる。スメアゴルは、ゴクリという別の人格を作り出すと同時に、指輪がもたらした長寿によって姿形もフリークとなる。この小人でフリークというスメアゴル=ゴクリの二重性は、道化性と不可分の関係にある自己分裂性を示す。スメアゴル=ゴクリは、「一の指輪」を奪い返そうとしてフロド

を追いかけ、妨害もするが、結果的にはフロドを「影の国 (the Land of Shadow)」へ導くことになる。フロドの妨害をするゴクリが「一の指輪」に仕える道化であるとすれば、意志に関わりなくフロドの道案内となるスミアゴルは「一の指輪」の保持者フロドの道化と見ることもできる。彼のこの二面性は言うまでもなく道化の特性である。

このように見てくると、道化性が「一の指輪」を介して増殖していくのがわかる。この指輪自体、両面価値性という道化の本質を備えている。一方ではサウロンの分身という悪そのものであるが、スミアゴルやビルボといった指輪の前所有者にとっては“my precious”と呼べるほどの肯定的な一面も持っている。指輪の持つこの両面的な価値は善と悪を兼ね備える道化の本質を象徴している。フロドが邪悪な指輪の悪に長期間対抗することができたのも道化が持つ両面性のゆえである。また足を踏み入れたが最後、悪に同化せずには戻ることができないとされる「影の国」モルドール (Mordor) にフロド、サム及びスミアゴルが行くことのできるのは、道化が善と悪の媒介者であるからだということができる。

フロドは指輪をサウロンの国モルドールに運んで壊すという任務を引き受けたが、この行為はサウロンには想像を超えた行為としか思われぬ。指輪を取り戻そうとしているサウロンの膝元に他ならぬその指輪を運び込むという計略は、世界の識者ですら愚行と呼ぶほどの奇抜な策略だと語られる。しかし「ウサギ」と間違えられるほどの弱小種族であるホビットが圧倒的な強者に打ち勝つには、愚行と紙一重の奇策を用いる以外に手だてはない。サウロンを騙すことが結果的にサウロンとその王国に滅亡をもたらし、アラゴルンによる王権回復という新しい秩序を生み出したのであるから、道化フロドは、単なるいたずら者 (= 「陽気な衆」) というよりさらに高次元の救済者となるトリックスター<sup>5</sup> (= 道化) であるといえる。

「滅びの亀裂」に近づくにつれて、指輪の魔力はますます強まり、フロドは指輪のこと以外何も考えられなくなっていく。指輪が内的対象としては“my precious”であるのに、外的対象としては破壊すべき悪の存在であるので、フロドは「二重拘束」の状態に陥っている。かくしてフロドの使命達成のプロセスは身動きのとれない苦難の道である。このフロドの状況を結果的に救うことになるスミアゴルは、フロドの個人的影が投影されたものと見ることもできる。影とは「ある個人の自我が否定し、受け入れがたいとする傾向のすべて」<sup>6</sup> の

ことをいう。フロドの「自我」は、指輪をはめるとサウロンに己の姿を見せることになるため、あまりに堅く指輪の使用を禁じてしまった。その結果抑圧された影が「自我」から自立し、「自我」の制御を超えて動き出すという「影の反逆」が生じることとなる。スメアゴルは、指輪の魅力に囚われているフロドの一面を代弁するものであり、この側面がフロドの「自我」から見て否定すべきものであるがゆえにフロドの「影」ということになる。物語の流れを見ると、フロドは土壇場で指輪の魔力に屈して指輪をはめてしまう。この時スメアゴルは、指輪を奪うためにフロドの指をかみ切るが、その瞬間にバランスを失って奈落の底に指輪とともに落ちていく。「影」であるスメアゴルが滅びたお陰でフロドは与えられた使命を達成できた。つまりフロドは「影」によって自己実現を果たしたことになる。ここに影の逆説の一つがある。

「影」の喪失は自己の可能性の喪失である。自らの「影」を失ってしまったフロドのこの自己実現は結局王の復権のために自らを贖罪山羊とする行為である。自分の「影」たるスメアゴルにファリック・シンボルの指をかみ切られてしまったことが指し示すように、「影」をなくしたフロドはその「影」を通じてのみ得られるはずの「永遠の女性像」を獲得する機会を逸してしまう。次の段階の自己実現に向けて歩もうにもフロドには合一すべき「影」がないので、フロドのこれ以上の成長はあり得ない。もはやフロドには現世は不要となる。最終的にフロドが西の彼方にある「不死の島 (Undying Lands)」に去っていくことになるのはそのためである。フロドは自らの可能性と引き換えに世界の「再生」ともいべきアラゴルンによる王権回復をもたらした。アラゴルンの治世は『指輪物語』の中では新しい世紀の始まりとして位置づけられ、人間の時代という新しい時代の始まりを物語るものとされている。フロドという「影」によって世界の再生が行われる。ここにもう一つの影の逆説がある。

スメアゴルという「影」の反逆によってフロドが自己実現を果たした瞬間は、同時にフロドという「影」によってアラゴルンが復権を果たした瞬間でもあった。『指輪物語』は二つの「影」の逆説、つまりアラゴルンの「影」のフロドとフロドの「影」のスメアゴルによって、王権が回復された物語といえる。二つの「影」の逆説がこの世を再生に導き、新たな世界の創造という新しい世の中をもたらしたことになる。山口昌男が『道化的世界』の中で「王権の神話として語られる王子の苦難・放浪・復興は、個人の生と死、死と再生の体験を介して、世界の死と再生、宇宙の覆滅と再創造の神話的次元において捉えなおさ

れる」<sup>7</sup>と述べていることを敷衍すれば、『指輪物語』はミドル・アースと呼ばれる架空の世界が王権神話を介していかに再創造されたかを物語る叙事詩的ファンタジーとすることができる。

叙事詩の特徴は、ミハイル・バフチン (Mikhail Bakhtin) によると次の三つである。国家の叙事詩的過去であること、その源泉が国民的伝説であること、その描かれる世界が絶対的な叙事詩的距離によって作者及びその聴衆の時代から分離されていることである。<sup>8</sup> 『指輪物語』は、妖精の活躍する過去の時代から人間の世紀への移行を物語っている。物語の源泉は、国民的伝説のないイギリスのために作者が構築しようとしている神話<sup>9</sup>である。さらに、三人称過去で語られるこの物語は道化フロドの書き残した歴史書に基づくものとされている。つまり現代の読者とこの物語世界の間には叙事詩的な距離が存在する。かくしてこの物語は叙事詩的ファンタジーとすることができる。道化の持つ特質の一つに叙事詩を書く詩人という特質がある。前作『ホビットの冒険』もこの物語も叙事詩 - 道化による道化の物語 - であるといえる。

## 注

- 1) テクストは、J. R. R. Tolkien, *The Lord of the Rings: vol. 1, The Fellowship of the Rings, vol. 2, The Two Towers, vol. 3, The Return of the King* (London: Allen & Unwin, 1954-55) による。
- 2) 河合隼雄『影の現象学』(思索社、1976) 182。また道化の概念について次の書物を参照している。Leslie Fiedler, *Freaks: Myths & Images of the Secret Self* (New York: Touchstone, 1978), Lewis Hyde, *Trickster Makes This World: Mischief, Myth, and Art* (New York: North Point, 1998), Enid Welford, *The Fool: His Social and Literary History* (London: Faber and Faber, 1935), William Willeford, *The Fool and His Sceptre* (London: Edward Arnold, 1969)。
- 3) 山口昌男、「王子の受難」『道化的世界』(筑摩書房、1975) 330-348。
- 4) J. R. R. Tolkien, *The Hobbit* (London: Allen & Unwin, 1937)。
- 5) 河合隼雄が『影の現象学』の中で「トリックスターと道化というのは、神話と現実という二つの違った方向に投影された同じひとつのものである」(182)と述べていることを援用している。トリックスターの概念については、山口昌男、『アフリカの神話的世界』(岩波書店、1971)、山口昌男、『笑いと逸脱』(筑摩書房、

1984) P. ラディン他著、背河宗一他訳、『トリックスター』(晶文社、1974)を参照している。

- 6) 河合隼雄、『昔話の深層』(福音館書店、1977) 97。
- 7) 山口昌男、『道化的世界』 345。
- 8) M. M. Bakhtin, "Epic and Novel," *The Dialogic Imagination*, ed. Michael Holquist (Austin: U of Texas P, 1981) 13-19.
- 9) *The Silmarillion* (London: Allen & Unwin, 1974) を『指輪物語』前史となるように作者は書いたが、ミドル・アースの全歴史が語られたわけではない。作者トールキンはエルフを中心に据えたイギリス独自の神話体系を作り出そうとしたが、果たせなかった。